

周作人の「私の雑学」に関する考察

A Study of “My Knowledge” by Zhou Zuoren

湯 麗敏

Tang Limin

一、始めに

中国著名な散文家にして、詩人、文学翻訳家でもあり、また新文化運動の代表の一人である周作人は、1944年の四月から七月までに「私の雑学」というタイトルの長文を書きあげていた。

それは「詩経」や陶詩から中国の古典小説まで、さらにギリシャ神話や文化人類学、生物や性心理学まで、医学、宗教学や女性学まで、二十節の長い記載で各分野に触れながら幅広く論述を繰り広げられたものであった。まさにそれは周作人が生涯通じて学んだものについての総まとめであり、彼が学んだ経験の集大成であったと言っても過言ではないだろう。

中国では国語教師の素養を高めるために、この「私の雑学」という本を推薦図書に指定している。彼が書いたその「雑学」は「常識」のようなものだと見なされているのである。「雑学」のなかに触れられていることは、実は「自分の身の回りにある必需品として、眼鏡や帽子やお菓子などのようなものだ」と周作人は謙遜している。また「自分は文人ではなく、学者でもない。たきぎを切ったり、水を汲んだり、掃除をしたりする雑役のようなことを日々こなしているだけなのだ。例えば、歌謡、童話、神話、民俗の収集、東ヨーロッパ、日本、ギリシャの文藝作品の翻訳なら、喜んでお手助けしたくなるのだ」¹と「自叙」に心境を語った。

したがって、小論は一、国文学の学び経験、二、外国語・外国文学への取り組み、三、日本の郷土研究と民芸への関心という内容を通じて、周作人がどんな「雑学」をしてきたのか、その「雑学」の特徴はなんなのか、今のわれわれにとって、周作人の「雑学」を読む意味がどこにあるかについて、本論を展開させていただきたい。

二、国文学の学び経験

少年時代から周作人はすでに様々な小説を読み始めていた。その読書歴は「鏡花縁」、「儒林外史」、「西遊記」、「水滸伝」、「三国志」、「聊齋志異」などの口語体の小説から文語文の作品への転換傾向が見られた。それらの大作を読むことによって、周作人は文語文に精通し、文語のおもしろさもよくわかるようになり、さらに「唐代の行書」にはまっている。これらの読書経験が後の周作人の読書方向を決定づけ、そこから周作人の「雑学」探求が始まったとも言えるのではないだろうか。

さて、周作人の書物への搜索や読書暦を調べれば一定の準則があることが分かる。種類別

に分けると八種類の分類できると考えられる。ⁱⁱ

- ① 「詩経」、「論語」のような古文の注疏類。
- ② 「説文解字」、「爾雅」、「方言」の類の小学書
- ③ 歳時記、風土と物産、例えば「夢憶」、「清嘉録」、「痛記」、「板橋雑記」などに代表されるような文化史料類、地誌。
- ④ 「顔氏家訓」、「入蜀記」に代表されるような年譜、日記、旅行記、家訓、書簡類
- ⑤ 「農書」、「本草」、「詩疎」、「爾雅」などに代表される博物書類
- ⑥ ノート類
- ⑦ 仏経
- ⑧ 故郷の賢人の著作

古文の注疏類の中で、周作人は一番好んだのは「詩経」だという。そのほか陶淵明の詩も大変気に入って、好んで読んだ。さらに、六朝より流行した韻文で、四字・六字の句を交互させ辞を対偶にした所謂「四・六文」を読むのも好きだった。南北朝時代の著書は四・六文のスタイルで書かれたのが多く、内容も秀逸で読みやすかったからである。

周作人のそのような読書経験は我々に彼の好き嫌い、性格、趣味、幅広い学問、彼の持ち味を教えてくれる。読書が周作人の後の人生形成に与えた影響は言うまでもなく大きかった。

読書のほかに周作人が強く影響を受けたのは儒教思想だと考えられる。彼は「中国人の思想は、いかに人間らしく行動するかということを重ねることである」と認識しているのに対して、儒家の思想は、仁と中庸を強調することである、そもそも前者と後者には類似点が多く存在する。

しかし、周作人は儒家の重んじた「仁」が大切なことであると認めつつも、それだけでなく、その上また「智と勇」も大変重要なことだと認識した。実際に「智と勇」を持つ「仁者」として周作人は読書を通して中国の漢から清の時代まで、よく調べた結果として、王充、李贄、俞正燮という三人を例として挙げている。そして彼らを中国の思想界では三つの灯火として存在していることを指摘した。ⁱⁱⁱさらに、彼らの世間への客観的な認識、真実を口にする大胆さ、真理を守ろうとする一途さを賞賛し、後人のために前へ進む道を切り開いた役割を果たしていたことを評価した。またそれらを理想の目標として、目指さなければならないと周作人は指摘した。

彼が「雑学」の一環としての読書を通じて、とくにいろいろなジャンルの小説を数多く読んだお陰で、早々にものを書くことができるようになり、自分なりのアイデンティティも形成されつつ、得たものが少なくなかった。

周作人の国文学の学ぶ経験により、われわれに教えてくれたことだと言うと多く読書すること。小説、曲、詩、歌、近代と古代のものに拘らず、文語文、現代文、本国のもの、外国のものなどすべて読まなければならない。さもなければ、文学と人生の全体的なことは知らない、そして自分なりの趣味と教養も磨くことができない。勿論すべて濫読に終わることにはいけない。勤勉に読書を通して、知識の増長にしたがって健全な人生観を持つようになる。

三、外国語・外国文学への取り組み

周作人は中国の文学作品からいろいろな勉強ができたことは勿論、ほかには外国から特に英語と日本語を媒介語としていろいろな分野の研究に取り組んだことにより、彼の「雑学」を幅広く深く進められたことも見逃してはいけない。

若い頃から英語と日本語を学んだ周作人は、またロシア語、ギリシャ語、世界語など、多国語を勉強していたが、勿論特に精通していたのは英語と日本語、ギリシャ語であった。

1901年17才の周作人は水師学堂に入学し、英語を習い始めた。外国語の勉強がまだ盛んになっていなかった当時の周作人の英語学習の目的は、おそらく外国の書物或いは一般の理科および機械の書籍を読むためだけであった。

そのとき、中国では英語版の書籍がそんなに多くあるわけではなかった時代だが、周作人の思い出によると、「最初の英語教科書は、「華英初階」「進階」というものであって、また参考書はコピーされた華英字典しかなく、ほかに読める本がどこにあるか、どのようにすれば入手できるかという事すら知らなかった。というわけで、多くの先輩たちは学校を卒業したら、持っているわずかな古本まできれいに片づけ、以降横文字の本は読まないということが全然珍しくはなかった。」^{iv} そうだ。だが、周作人は小さい時から小説を愛読しており、中国の作品のほかに翻訳作品も数多く読んだ。

そして1906年からの六年間ぐらい日本での留学経験を通じて、周作人は日本語の習得もできた。東京での留学期間では、日本語版の本はもちろん、英語版の本も簡単に手に入ることができたので、彼は思う存分に読書にふけることができたのである。

彼が読んだのはイギリス文学作品のようなものばかりではなくて、英語の本なら、なんでも片っぱしから雑読、濫読した。なかにはヨーロッパ弱小民族の文学作品もたくさん読まれたことが分かった。たとえば、ポーランド、フィンランド、ハンガリ、新ギリシャなどの文学作品の類のものが多かった。

周作人はまた日本語に訳されたロシアの作品も読み、なかでも特に長谷川二葉亭と昇曙夢両氏に訳された作品に大きな関心を示した。

一方、1905年に東京で中国同盟会の機関誌の「民報」が創刊されたことに従って、中国革命運動がしだに大きくなつて来たことによつて、周作人は強国より弱小あるいは、抑圧された国、侮辱された民族の文学に多大な関心と親近感を覚えるようになった。

それは恐らく封建社会、専制制度に対する周作人の反抗心理、一種の民族思想の影響による現われた傾向だろう。

東京留学の間に、まず入手したのは「英文学の中の古典神話」で、その後には「神話儀式と宗教」というのもあった。これがおそらく初めてのギリシャ神話との出会いとなり、そしてそれも英語を通じての出会いとも言えるかもしれない。

英語版の本からたくさんの知識を得た周作人は、雑学をどんどん進んでいて、1908年からギリシャ語も勉強しはじめた。そのおかげで、以降ギリシャ神話集の翻訳に大いに役に立った。そもそも周作人のギリシャ神話に対する関心と興味を持つようになったのも西洋文学に対する興味に起因すると考えられる。

周作人が言うには、西洋文学を知ろうと思えば、必ずギリシャ神話も知らなければならない。だからアポロタロスの原典、フォクスとローズの作品、ハリソンの「ギリシャ神話論」、神話

の人類学派的な解説及びいろいろな宗教の本も周作人の「雑学」の範疇とされていた。

ギリシャ神話に魅力された周作人は、神話に「ある種の精神力」が多く深く潜んでいると認識し、ギリシャ精神によりたとえ起死回生のことができなくても、せめて若返るという力を持っていると周作人が固く信じていた。彼はヨーロッパの文化史上から現われてきた数多くの現象を通じてその精神力、若返る力があることを立証し、その上さらに、神話が人間生活における大きな意義と役割を指摘した。

一方、その当時の中国では長年の封建専制制度と科挙制度の重圧により、人々の内心に醜悪と恐怖感が充満し、精神状態が完全に衰えていると見ている周作人はギリシャ神話の力によって少しでも人々の精神世界を救い、中国の現状を変えようと思い、さらにギリシャ神話及びその神話に潜んでいた精神と力を中国の国民に知ってもらい、理解してもらおうとするために、ギリシャ語の作品の翻訳にも精を出した。

周作人は外国の文学作品を翻訳と紹介することに当たっては、目的性と方向性を持ちながら、特に教育意義があるかどうかという基準で作品を厳選していた。たとえば、1934 年古典学者のロース博士によって書かれた「ギリシャの神様と英雄と人」という作品が大変面白い、古い伝統の民俗風習に対する理解も深い作品だと周作人は評価していたものの、結果としてはキリスト教国の作者が書いたものであり、すべてが、良いというわけではなく、特に中国の児童向けの通俗的な読みものには相応しくない部分もあるから、周作人は、遂にそれを翻訳しようとは思わなかった。

なぜならば、周作人は、ギリシャが中国と日本のように、固有の宗教道徳を守りながら随時に新しいものを取り入れていけるならば、仏教も、キリスト教も共に存在ができ、調和をとりながら社会を発展し、より興味深い社会が形成されるのではないか、しかしギリシャがまだそんなに理想な社会になっていないと考えていたからだろう。

そもそもギリシャの「習俗と神話」、「神話儀式と宗教」という二冊の本は、周作人の伝説と児童に関する研究の入門書になった。「習俗と神話」、「神話儀式と宗教」により彼が神話についての的確な解釈を得ることができ、しかも神話伝説及び童話の真意をさらに深く理解し、もっと詳しく知ることができたのは (Hartlan) の「童話の科学」と (Macculloch) の「小説の童年」という二冊の本のお陰だったようだ。

留学生として東京に行った周作人は、その後日本人高島平三郎が編集した「歌詠—児童の文学」に出会った。また彼が「児童研究」という著作を入手してから、児童文学の分野にもいっその興味を持つようになった。当時日本では児童文学の存在がようやく人々たちに認識されつつ、重視されはじめたばかりだった。

そこで、周作人の雑学は文学の領域を越えて、児童研究という分野に入った。英語版、日本語版の児童研究についての書籍は当然周作人の雑学の「教材」となった。それらの殆どが本屋から入手された古い本であったけれども、研究心が旺盛な周作人にとってそれらがすべて大変貴重な参考資料となったことは間違いない。

前からずっと児童劇に興味を持っていた周作人は、かつて読んだアメリカや日本などの児童劇を中国の読者に熱心に紹介した。彼は子供たちの需要にこたえられるような優秀な文芸作品を提供するのが自分たちの持つべき義務であると意識しているので、よく優秀な外国の児童劇を抜粋

して翻訳と編集に力を入れてきた。それによって児童の歌、童話のほかにもまた優れた児童劇も中国で生まれるようにと周作人は切に願っていた。

周作人の雑学の特徴の一つと言えるのは、内容が多様性、触れる面が広いこと。彼は国文学の学びのほかに、よく外国語を勉強し外国の文学を取り込み、勿論外国文学の紹介と翻訳を含めた「雑学」を大変熱心に進めてきた。

上記で述べたとおり、英文学やギリシャ文学などいわゆる外国の文学と言っても西洋文学より実は日本文学のほうが周作人にとってはさらに重みがあるようなものだと感じられる。

彼は「雑学」の一環として日本の俳句、川柳、狂歌、小唄、滑稽本、落語などを熱心に取り込み、その上また日本の近代小説の翻訳にも重きを置いた。

彼の「雑学」の成果として、二十世紀の初期に日本の俳諧の代表者である松尾芭蕉及び他の俳諧短歌、俳文を中国に紹介し、また日本の文芸を批評紹介の文章も数多く発表したことによって、中国文壇での日本の短歌、俳句に対する理解がしだいに深まっていた。

日本文学の紹介と翻訳のほかに、日本の文化、日本の民俗及び日本の民族意識についての研究も周作人の「雑学」の内であったと読み取れる。日本に対する認識と思いについて、周作人は数多くの文章を残している。たとえば「日本への浅見—その1～4」に「日本の衣食住」、「日本の民族意識」、「中日関係」などの文章が収められた。

ところが、周作人の日本文学、日本の文化、社会との関わりは、厳密に言えば、日本留学の時期から始まったとすることができる。彼は当時日本の文学者である夏目漱石、坪内逍遙、森鷗外、永井荷風などの文壇の巨匠たちを尊敬し、白樺派の文学者たちの活動にも時とき参加することにより、自分の文学活動に大きな影響を与えた日本の明治時代の文学に深い親近感を抱いていた。

なぜならば、一つは、中日両国の文化がある程度の類似点と深いつながりがあったから、もう一つは、周作人が個人として持っている趣味或いは教養、或いは受けた影響によるものだろう。とにかく彼が中日文化史上において両者の交流に多大な貢献をしたと評価されている。

上述のように、幅広く深く雑学をした周作人は、外国語により外国のものを勉強したり、研究したりすることによって、視野がいつそう開け、知的な面も感情の面も周作人は多大な収穫を得た。彼は以下の言葉を残している。「若者たち、チャンスがあればなるべく外国語を多く勉強した方がよい。それは益があつて損がないことだと信じている」^v。

俗に、扉を開ければ風通しもよくなる。というが、よその国の言語を一つでも多くマスターすれば、まるで窓やドアが開いた部屋のように日差しがよくなり風通しもよくなる。また美しい景色も眺められることの如く、外国語を使って、よその世界をよりよく知り、よりよく理解ができる。それは周作人が自分の「雑学」の経験から現代の若者たちに伝えたい一種のメッセージなのである。

四、日本の郷土研究と民芸への関心

周作人が言うには自分の「雑覧」により、日本から得たものが少なくなかった^{vi}。確かに日本を背景に地方の色彩が濃い日本の郷土、民芸、民俗を研究することも周作人の「雑学」の一大テーマとなった。

どうして周作人がそこに目を付けたのかについて、先行研究者——呉紅華氏の著書「周作人

と江戸庶民文芸」の文を引用しておきたい。

「周作人が留学当初に江戸庶民文芸に興味を示したのは、東京の庶民の生活などが中国明・清の頃に似ていると見て、そこにノスタルジーを感じたからである。」

それはその後の周作人が日本の郷土、庶民文芸に対する理解が深い要因の一つになったと言えるが、また単にノスタルジーを掻き立てられる以上に、日本庶民文芸の中には、確かに中国文化を源とする流れがあったことも事実であった。そのような背景の中で日本留学をした周作人が日本の事情、郷土、文芸、宗教、民俗に対する興味が深くなったことはしごく当然と言っても過言ではない。

彼によれば、日本のことをよく知るために文学芸術のほかに必ず庶民の感情と生活にも目を向けなければならない。さらに宗教を知ること非常に重要な一面だと指摘した。彼は中国と日本を比較しながらこういう結論を出した。

「中国の民衆の感情と思想は鬼に集中するのに対して日本は神様に集中する。中国を知ろうと思えば中国の礼儀、風俗から研究すべきで、日本を知ろうと思えば日本の宗教を研究すべきである。」^{vii}。

日本において民俗学研究を主導、民間伝承の会、民俗学研究所を設立した柳田国男をととても尊敬し、彼の学識に感服した周作人は、柳田氏の著作である「日本之祭事」、「遠野物語」、「石神問答」などを熱心に読み、研究に没頭した。

それと同様にまた日本の民芸運動を提唱した民芸研究者・宗教哲学者である柳宗悦にも関心を示している。柳氏は雑誌「白樺」の創刊にも加わり、宗教についての文章も数多く残している。柳氏の「宗教とその本質」、「朝鮮とその芸術」「信と美」「器の美」「工芸の道」などの著作をほとんど読んでしまった周作人は、柳氏に対して文章が素朴且つ内容が豊富、意思が誠実、また神秘の話もあり、それに中世のキリスト教と仏教にも通じるものがあるため、非常に面白いと評価をした。

中国の浙江省紹興出身の周作人は、故郷のほかに北京、東京にも長く暮らしたことがある。生活の中で、自然に対する観察や思いを人以上に重視し、深い興味を持っていた。東京は彼にとって外国であるけれども、東京に好感を持ち、この地方の人情風物、民俗民芸に好んで触れた。当時の戸塚正幸が編集した「江戸之今昔」、福原信三の「武蔵野風物」など、大抵旧東京府下の今昔史跡を描いたものなので、その中にはまた民間に使われていた道具も民芸品も数多くあげられた。

だから周作人は文学作品と同じように趣がある絵を觀賞することも好き、芸術及び学問もそこに潜んでいるからだ彼がよくこういうふうに見ていたのではないか。

いろいろな分野に触れる周作人の幅広い「雑学」は、もっと以前の徳川時代の浮世絵にまで溯っていくことができる。世界でも有名になった「東海道五十三次」、「富岳三十六景」など、というような作品、風景をもちろん、特殊なカラー木版画を鑑賞することができるのは、最高の芸術享受だと周作人が思っていた。

そこで、浮世絵の木版画を鑑賞しながら思わず中国の木版画と比較をした。彼の目に映された浮世絵の特色が風景に重きを置いたのではなく、市井風俗に重きがあるということだとわたしは思う。そもそも浮世絵と名付けられた原因もそれだと彼が理解をしているのではないか。

背景は市井であり、人物は大抵女性であった。しかも妓女を描いたのが多かったので、浮世絵に触れると自然に吉原遊廓まで関連してしまいがちになる。

周作人から見れば、其の両方には、確かに綿密な関係がある。華麗な画面の艶美な色彩に対して、いささかの暗い影も秘められている。これを周作人は「東洋の色」と決め付けた。

ここで周作人がとても気に入った永井荷風の「江戸芸術論」の中の第一章「論浮世絵の鑑賞」中の第五節の一段を引用しておきたい^{viii}。

「且して余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴェルハアレンの如く白耳義人にあらずして日本人なりき。生まれながらにしてその運命と境遇とを異にする東洋人なり。恋愛の至情はいふも更なり、異性に対する凡ての性的感覺を以て社会的最大の罪惡となされたる法制を戴くものたり。泣く児と地頭には勝つ可からざる事を教へられたる人間たり。物云へば唇寒きを知る国民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血滴る羊の美肉と芳醇の葡萄酒と逞しき

婦女の画も何かはせん。嗚呼余は浮世絵を愛す。苦界十年親のために身を売りたる遊女が絵姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯茫然と流れる流れる水を眺める芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売りの行燈淋しげに残る川端の夜景はわれを酔はしむ。雨夜の月に啼く時鳥、時雨に散る秋の木の葉、落花の風にすかれ行く鐘の音、行き暮る山路の雪、およそ果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯夢とのみ訳もなく嗟嘆せしむるもの悉くわれには親し、われには懐かし。」

周作人はこのような感嘆に満ちた永井荷風の言葉にひどく心をうたれて、自分の作品に何回も引用したことがある。ほかにまた、周作人に注目されたあるいは好きだったと言ってもいいのは、永井荷風の「日和下駄」という作品であった。彼は繰り返して何遍も読み、そして自分の作品にも何回か引用し、読むたびにいつも思わずに中の言葉を思い出すほど気に入っていたようだった。

中国人だからその感想が永井荷風と必ずしも全く同じであるわけではなく、東洋人の悲哀という感情がある程度共通なものとして周作人もおそらく持っているのだろう。

一方は風俗画でありながら、日本伝統の美学、美意識に共感、共鳴をし、もう一方は、そこから失望感、がっかりした気持ちも自然に引き起こされていることもあると考えてもよいだろう。

なので、もし浮世絵を風俗画と言えらば、日本の川柳を風俗詩ということができるだろう。幅広く雑学をする周作人が日本の川柳、落語、滑稽本にも興味を持っていたことは言うまでもないことだ。

例えば、十七文字で作られた風刺詩の川柳は、社会の人情風俗を素材に作られたもので、もしその時代の庶民の生活に詳しく知らなければ、なかなかそれを理解が出来ないのではないかと思っている。

だが、一概に周作人が日本の文化、文学芸術、日本の生活と民俗に興味を持っているというより、日本江戸時代の生活を背景にした近代の芸術と文学に周作人が特別な感情を持っていたといわなければならない。

というのは、日本の落語、浮世絵、滑稽小説などは、いわゆるみんな江戸時代の俗文学であり、彼から見れば、一方、面白さがあり、もう一方は庶民の文学、あるいは庶民生活の中から

生まれてきた文学だから、実はそれらを受容しながら、周作人の「平民文学」という理論が打ち出されたことにも繋がっていくことができるというふうに考えられる。

さらに、日本での留学生活により中国の古い風俗をたくさん伝承されていたことを周作人は確認が出来たから故に日本の近代の芸術と文学、民俗に対して特に愛着を感じられたのではないか。

彼の「苦竹雑記」という作品の中に「日本の衣食住」という文章が載っていた。周作人がこう書いている。

「中日は同じ黄色の蒙古人種であり、日本の文化はもともと中国から強い影響を受け入れたけれども結果としては、似ている部分と違う部分があった。日本はよく鑑別と選択をしていた。結局唐の時代に宦官を取らず、宋の時代に纏足を取らず、明の時代に八股文を取らず、清の時代にアヘンを輸入しなかった事など、私は日本のよく鑑別と選択することに深く感服する」。

上記のように、周作人は封建制の暗い中国社会を速やかに改革してほしい、よって良い中国になるよという切なる思いを込めて書かれたものだろうと私は思う。

五、まとめ

上述を持って周作人の雑覧雑学を述べたのだが、周作人の雑学を改めてその特徴をまとめてみると次の三点を羅列することができる。

①雑学の内容が多く深く幅広いこと。

②雑学というとただの雑覧ではなく、読みながら本国の事と比較しながら執筆活動に力を入れること。

③雑学の一環として多国言語への挑戦、外国語の習得により本国に有益な優秀な作品の翻訳に精を出すこと。

雑学で触れた多種多様な内容をまとめてみれば、ヨーロッパ文学、ギリシャ文学、神話学、生物学、児童学、性心理学、アイリスの思想、医学史と妖術史、日本の郷土研究、写真集と浮世絵、川柳、落語、滑稽本、外国語と訳書、佛教の経典と戒律などがある。

雑学で関わっている地域性の広さを見ると西洋から東洋までの広範囲になっている。そして時間空間のスパンが大きいという特徴も見られる。

周作人は自分のことをこうまとめていた。「知識の面では、西洋のものから影響を多く受け、感情の面では、日本からの影響を多く受けていた。しかし心あるいは気持ちの面では、完全に中国的であって、外来の感化による変わりがなかった。」¹³ それがつまり周作人の異国の影響を受け入れながらも酌量する基準になっていたことをわれわれに分かれた。

しかし、何といても周作人の雑学の中に比重が大きい部分は日本についての内容であった。日本語を勉強して日本の文化、文学、芸術、民俗を研究する。また日本の生活、風俗習慣の中から「情」という栄養素を思いきり吸収し、それにより培われた審美観で、周作人が自然と人間社会を観察ができた。結果としては、彼は人生を苦しいものだと見なし、悲観的な論調が割合に多かった。

それは彼が書いた作品のタイトルに「苦」という文字がよく使われたことから見ると、まさにこういう心境の表れだろう。例えば『苦口甘口』、『苦茶随記』、『苦竹雑記』、『苦雨』、『苦茶

について』など、さらに自分の書齋を「苦雨齋」という名前まで命名した。

そういうわけで、周作人の「雑学」により、われわれは、彼の少年時代からの豊富な読書経歴、彼の社会論、人生論、価値観及び彼の知識趣味までよくわかるようになり、同時に彼の大変寂しい人生像もそれによって見えてくる。

当時暗い不安な封建社会に身を置かれた人にとっては、いかに「人生の孤独、寂しさ」から逃げだすか、耐えていくかは、確かに難しいことである。しかし周作人の気晴らしをすることを言うと、書物という広い天地に目を向け、その中から「気に入った友人」を探し、孤独の状態から自力で抜け出すという方法は現代のわれわれにも大いに参考となる。

参考文献

- ① 知堂回想録 上 安徽教育出版社
- ② 知堂回想録 下 安徽教育出版社
- ③ 周作人論 上海人民出版社
- ④ 周作人評析 陝西人民出版社
- ⑤ 苦口甘口 実用書局出版
- ⑥ 周作人と江戸庶民文藝 創土社
- ⑦ 自分の園地・雨天の書 人民文学出版社
- ⑧ 周作人と日本文学 翰林書房
- ⑨ 東洋人の悲哀 周作人と日本 河出書房新社
- ⑩ 周作人集 上 花城出版社
- ⑪ 周作人集 下 花城出版社

i	『周作人自叙』
ii	『知堂回想録』下 465 頁
iii	『雑学』 199 頁
iv	『周作人集』 916 頁
v	『知堂回想録下』 488 頁
vi	『苦口甘口』 90 頁
vii	『雑学』 十四
viii	『永井荷風』第十四卷 11 頁
ix	『苦口甘口』 88 頁